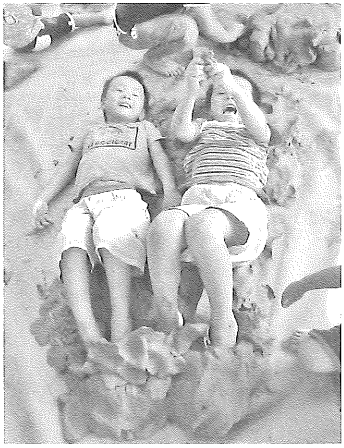
特集　子どもと土

# 粘土と遊ぶ

南陽慶子

私は二〇〇八年の春まで、浜松市にある浜松こども館(以下、こども館)にて、造形遊び活動の企画・運営に携わっていました。こども館は、学校や家庭とはまた違った「第三の場所」として、地域の子どもの文化・交流の場としての役割を担っています。さまざまな文化や家庭環境に育った、それぞれに異なる背景をもつ多くの子どもたちが「今、ここ」を共有する場です。

こども館の造形遊びは、子どもたち一人ひとりが素材とじっくり向き合い、とことん遊び、感じ、考え、自分なりに表現することを目指しています。そうした取り組みの中、二〇〇七年度より新たに始められたのが、土粘土*遊びの活動です。現在約七〇〇キログラムの粘土があり、「粘土の日」には、子どもも大人も自由に粘土で遊ぶことができます。



二〇〇七年九月からは、館内での活動に加え、館スタッフが粘土を携えて市内の保育園・幼稚園などに出向き、子どもたちに粘土遊びの機会を提供する

出張活動も行っています。私は二〇〇八年にこども館を退職しましたが、現在もこの活動にかかわらせていただいております。

本稿では、こども館の内や外での粘土遊びを通じて、子どもたちがどのように粘土と出合い、そしてそこから何が生み出されたかを、粘土という素材の果たす役割を交えてご紹介したいと思います。

## なぜ「土粘土」か

粘土は、造形素材の中でも特に触覚的であり、やわらかな感触で身体になじみやすく、可塑性に富み小さな子どもでも自在に変形することができます。相手に合わせて精巧にもダイナミックにも反応してくれ、身体が加えた力に応じて変形する、応答的な素材です。そして、気に入らないときやうまくいかないと思ったときは、何度でも作り直すことも、元の塊に戻すこともできます。また、自然素材である「土粘土」は、時間の経過と共に粘土自身も変化していきます。粘土は、ある種のパフォーマンス性をも含んだ、生まれて立ち上がって消えていくというプロセスをもった「生きる」素材なのです。

## 「枠」のない粘土遊び

粘土遊びには、「こうしなければ、遊べない」というようなルールや決まりごとがありません。こども館での粘土遊びの目的は、何かを形づくることではなく、粘土とのかかわりを通して心と身体を開放し、他者(人・もの)との触覚的・身体的なコミュニケーションを図ることにあります。したがって、私たちは、作るための指導をするのではなく、子どもたちの気持ち、そして主体的につくられていく遊びや表現に寄り添うよう心がけています。

粘土遊びから生まれる表現は実にさまざまです。

▲個々の思いとペースに寄り添う粘土

たとえば、細かくした粘土をたくさん並べること。M（四歳児）は、平らに伸ばした粘土の上に、細長く成形した粘土をぐるりと植えていきます（右の写真）。その姿は、一心不乱に黙々と仕事に打ち込む職人のようであり、何かに突き動かされているかのようでもあります。Mはこれを二つ作り終えると、「よし」という表情で手をパンパンと払い、振り返ることなく部屋を後にしました。別の日も、約三十分間ひと言も発さず黙々と同様に作り続けます。その周りには、年少児が数人集まり、やはり黙ったまま、Mの手から次々生み出される何かに見入っています。ひとしきり作り終えたMは、すくっと立ち上がり、集まっていた年少児に「全部食べていいよ」とだけ言い残してやはりその場を去りました。

ちぎり取った粘土を黙々と（成形して）並べるという行為は、形は違えど二歳ごろからしばしば見受けられます。それは、ただやみくもに粘土を置いているのとは違うのです。こうした子どもたちと共にいると、子どもの内にあるリズムの存在を感じずにはいられません。子どもたちの表現、あるいは心の状態は、独自の審美的なバランスをもっているのだと思います。Mは、その内的なリズムに心ゆくまで浸り、そして最後の一瞬外に向けても開かれたように感じます。内的な表現の自由が保障されてこそ、その表現は共有と相互作用をも生んでいくのではないでしょうか。

また粘土遊びをしていると、子どもの身体がどんどん粘土に近づいていくのを感じます。顔、手足、お腹、頭など、身体のあらゆるところに粘土を貼り付ける子、巻きつける子、粘土で自分の手足を包みグローブや靴にする子など、粘土を身体の一部にする姿がよく見られます。また、粘土の塊のほうに自分の身体をめり込ませていき、身体を粘土の一部にするかのような姿も見られます（タイトル下写真）。

子どもたちに、文字通り粘土と一体になりたいという気持ちを起こさせるのは、子どもたちにとって充分な量の粘土が用意されていたからということもあるでしょうし、また、やはりそれが自然素材である「土」の粘土だからということもあるでしょう。

後日、保育園の先生から聞いた話ですが、粘土遊びを終えて昼食の準備中に「ぼく、顔汚いままでいい？」と顔に付いている粘土を、まだ洗わないでいたいと言う子がいたそうです。先生はその子の粘土とまだ離れたくないという気持ちを感じ「いいよ」と、そのまま昼食を始めたそうです。

## 何を作っても、作らなくても

粘土遊びの良さは、何も作らなくてもいいところにもあります。粘土遊びでは、ひと目で何とわかるようなものを作る子がいる一方で、手のひらに一片の粘土を持ち続けるだけだったり、ひたすら粘土を転がしたり、粘土の塊をなで、引っかき、そっと押すなどして、表面のささやかな変化をじっと見つめていたりするだけの子もいます。ともすると、後者のような子どもたちは「遊べていない」などと見なされがちです。しかし、子どもの内側で起こっているイメージの世界は、必ずしも目に見える形となって表れるとは限らないのではないでしょうか。

粘土をただ握っているだけでも、手の中にはその柔らかさと温度を感じます。私は、そのような子ど

▲粘土が時間・空間・仲間をつなぐ

もたちの、粘土とひそかに話しているかのような時間も大切にしていきたいと思うのです。

何を作っても、作らなくてもいい。触れているだけで粘土に気持ちと身体を預けられる、粘土が受け止めてくれる……。それだけでも、粘土は大きな役割を果たしているように思います。

子どもは本来遊びを通じ、身体や五感や生理によって他者(人・もの)とつながっています。「土粘土」という素材とその遊びは、このプロセスにとても近いものではないでしょうか。

しかし、そのつながりが最大限に展開されるためには、大人自身のあり様も含めた環境づくりが大きな影響をもつのだということも、忘れてはならないでしょう。一人ひとりがありのままの姿で安心して「今、ここ」にいられること。粘土遊びに限らずすべての造形遊びが、子どもたちにその自由を保障する場となることを願っています。

(お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科
人間発達科学専攻　保育・教育支援コース
博士前期課程)

こども館で用いる粘土は土粘土です。いろいろな種類の粘土と区別するために、ここでは「土粘土」と言うことにしました。土粘土は、園で一般的に使われている油粘土のような油臭さやベタベタとした感触もありません。